

ルカによる福音書1章38節 「御言葉通りに成る」

1A ガブリエルの派遣

2A マリアへの言葉

1B 処女

2B 神からの恵み

3B 大いなる方イエス

3A 聖霊による懐妊

1B いと高き方の力

2B 不可能なことの無い神

4A 「お言葉通りに」

1B 静かに受け入れる姿勢

2B 大きな犠牲

1C 不品行の誹り

2C 心を突き刺す苦しみ

本文

ルカによる福音書1章を開いてください。私たちは今日から新しく、ルカによる福音書を読んでいます。午後は、1章を全て読み終えませが、一節ずつ見て行きたいと思っています。今朝は、1章38節を中心に見て行きたいです。「マリアは言った。「ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」すると、御使いは彼女から去って行った。」

ルカによる福音書は、マタイと同じくイエス様の誕生から始めています。いや、マタイも書かなかったバプテスマのヨハネの誕生の話と、イエス様のご降誕の話とを、交互に話しています。バプテスマのヨハネが、イエス様の先駆者として、その現れの道備えをしたように、その誕生もイエス様よりも六か月ほど先んじて生まれ、その母が暖かく懐妊したマリアを喜び迎えたという、美しい話になっています。世界に救いをもたらす王を、産む器としてマリアが選ばれた。その選びを、マリアがそのまま静かに受け入れたところを、今、読みました。私たちは今朝、主に用いられる器になることについて、学んでいきたいと思えます。

1A ガブリエルの派遣

一つ、選びの器になるとは、神のご計画の一部を担うのだということです。神は、メシア、キリストを遣わすという約束を、ご自分の計画の中で最も中心に考えておられました。アダムとエバが罪を犯して以来、すぐに蛇に対して語られたのが、「女の子孫が、蛇の子孫のかしらを打ち砕く」という

ことでした。人が悪魔に惑わされ、罪を犯したことによって、損なわれてしまった神と人との関係を修復するために、サタンの脳天を打ち砕く働きをする者を、女から生まれて来る者たちの中から起こす、ということなのです。

当時、王や預言者が、その働きに任命される時に油を注いだのですが、人を救う方として神が任命する人を「油注がれた者」という呼び名を付けられました。それが、メシアです。主は、そのような人物を遣わすことを、ダニエルに対して語られましたが、語られる内容は、天使ガブリエルに委ねられました。「9:25-26 それゆえ、知れ。悟れ。エルサレムを復興し、再建せよとの命令が出てから、油注がれた者、君主が来るまでが七週。そして苦しみの期間である六十二週の間、広場と堀が造り直される。その六十二週の後、油注がれた者は断たれ、彼には何も残らない。次に来る君主の民が、都と聖所を破壊する。」エルサレムを再建せよという命令が、紀元前 445 年に出され、69 週後は 493 年後ですが、ちょうどイエス様がエルサレムにろばの子に乗られて入城されました。けれども、「油注がれた者は断たれる」と預言されています。これが、キリストの命が絶たれることの預言です。

このことを、紀元前 539 年頃にダニエルに対して、ガブリエルが伝えたのですが、今、530 年以上経った時に、マリアに現れて、その救い主をあなたは懐妊することになるのだと伝えに来ました。神のご計画の中での中心に、一人の少女、と言っても語弊ではありません。おそらく今の社会では考えられない若さですが、中学生ぐらいの年齢だったと思います、その少女にそのご計画が実行されることを告げに来たのです。

2A マリアへの言葉

1B 処女

ルカは、1 章 26-27 節で、彼女が「**処女**」であったことを強調しています。ガリラヤのナザレという村の一人の処女であり、そして、その処女は、ダビデ家系のヨセフの許嫁であったと書いてあります。許嫁ですから、まだ婚姻しておらず、性的関係は持っていなかったのです。神は、ご自身の選ばれた救い主を世に遣わす時に、それがいかに大きな出来事で、目に留めるべき出来事であるかを示すために、印として、処女からの降誕を用意しておられたのです。

このことも、予め預言によって示しておられました。紀元前八世紀にイザヤが、「7:14 それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」と預言しました。そんな数百年も前から、神は予め示されるほど、ご自分の懐に温かくしまっておいたものでした。インマヌエルとは、「神が共におられる」という意味で、つまりその子が神ご自身の現れであり、その印として処女の懐妊です。女から生まれて来る子が神ご自身など、誰が信じるでしょうか？なので、印も処女からの降誕というものでした。

2B 神からの恵み

そして、選びの器になるとは、神の恵みを受けることです。ガブリエルは言いました、「1:28 おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。(あなたは女の中で最も祝福された方。)」おめでとう、と声を掛けました。そして「恵まれた方」と言われています。これは、非常に好意を受けていますね、という意味です。かつて、ノアが、「主の目に恵みを見出した(創 6:8 参照)」と言われました。全世界の人々を消し去るという時に、ノアが洪水から救う箱舟を造り、彼の家族から新たな人類を増やすというご計画を担われていたのです。彼には、そのようなことを受けるに値しない者であるにも関わらず、彼はその光栄にあずかりました。マリアも同じです。ここで、すべての女の中で最も祝福されたと呼ばれていますが、女の子孫からメシアが出て来るのですから、その女として選ばれたということは、大いなる祝福です。

3B 大いなる方イエス

そしてガブリエルは告げました。「1:31-33 見なさい。あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。その子は大いなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません。」

この言葉はそのまま、預言者イザヤが前もって語っていたことです。「9:6-7 ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に就いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これを支える。今よりとこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。」この方は、みどり子として生まれるだけでなく、「ひとりの男の子が私たちに与えられる」とあります。男の子と訳されていますが、御子と訳されてもいいところです。なぜなら、次に神ご自身の名が付けられているからです。不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君と呼ばれているのです。人として生まれる方が、神によって生まれた御子であり、神ご自身であるということです。そして、その方がダビデの王座に着く、つまりキリストなのだということです。この預言と、今のガブリエルの言葉を比べれば、この言葉がイザヤの預言そのものであることが分かります。

「イエス」という名は、ヘブル語で「ヨシュア」です。ところで、マリアはヘブル語で「ミリアム」です。そう、モーセのお姉さんと同じ名前です。そしてヨシュアは、「主は救い」という意味から来ています。この方が、「大いなる者」となると言われています。イエス様は大いなる名を与えられました。実に、「2:9 神は、この方を高く上げて、すべての何まさる名を与えられました。」とピリピ書にあります。そして、「いと高き方の子」とは、まさに「神の子」と言っているのに等しいです。そして、ダビデの王位が与えられると言っていますが、これはダビデに対して主が、彼の王座に着く彼の世継ぎの子が、神ご自身の子となり、永遠にその国を治められると約束されていました(Ⅱサム 7:13)。そして、今

はなした、永久の支配が続くということです。ものすごい約束です。自分の胎に宿る子が、そうなる
というのです！

3A 聖霊による懐妊

1B いと高き方の力

そしてマリアは、「1:34 どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。私は男の人を知りませんの
に。」と尋ねています。これは、「そんなことは信じられない」という意味ではなく、「どのようにして、
そんなことが起こるのでしょうか・男の人を知らないで、そのようなことがどのように起こるの
でしょうか？」という意味です。

そこで、ガブリエルは、「聖霊の力によって身ごもる」ことを教えます。「1:35 聖霊があなたの上
に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼
ばれます。」聖霊なる神が、このことを行われます。そして、聖霊が臨まれると、いと高き方、すな
わち父なる神の力が臨み、それで懐妊されます。

それゆえに、「生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます」とあります。聖書には、アダムから
受け継がれていく罪について書いてあります。「ロマ 5:12 ちょうど一人の人によって罪が世界に入
り、罪によって死が入り、こうして、すべての人が罪を犯した」アダムが罪を犯したことによって、彼
から生まれる子も罪を受け継いでいるとされます。一人一人は、神によって造られた、神のかたち
を持っていますが、しかし、そのかたちが、アダムの子孫であることによって損なわれている、損傷
しているのです。ですから、神の聖なる霊が直接、女の胎に臨まれ、その罪の性質を受け継ぐこと
なく、聖なる方としてお生まれになることができたのです。そして、神の本質をすべて持っている方
として、神の子としてお生まれになったのです。

創世記 3 章 15 節が、先ほど申し上げたように、キリストについての初めの預言になります。「わ
たしは敵意を、おまえと女との間に、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、
おまえは彼のかかとを打つ。」ここの「女の子孫」は、もっと直接的に訳すと、「女の種」となります。
そうです、子種のこと、精子のことです。女は卵子であり、精子は男が生み出すものです。これは、
直接的に神が介入され、女の胎に男を介さずに種を与えたことを示しています。

2B 不可能なことの無い神

神は、このことが人には全く不可能であることをよく知っておられます。そこで、ガブリエルがマリ
アに対して、バプテスマのヨハネを胎に宿していたエリサベツのことを語りました。高齢であり、不
妊であったのに、それでも神が男の子を宿しています。これは、まさにイサクを宿していたサラの
ようなものであります。サラに対して、主がかつて語りかけた言葉を、マリアにもガブリエルが語り
ます。「1:37 神にとって不可能なことは何もありません。」私たちは、このことでいつも信仰が試さ

れます。神にとって、不可能なことがないのです。誰がやるか？をしっかりと見ていないといけません。自分の物差しで、どうしてもこれは可能か、不可能かを考えてしまうからです。しかし、神を物差しにしないといけません。

4A 「お言葉通りに」

1B 静かに受け入れる姿勢

このようにして、じっくりとガブリエルがマリアに言った言葉を見ました。その時に、「**ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。**」と言ったのです。これが驚くべきことです。これほどの従順があるでしょうか？彼女は、自分を「主のはしため」と言いました。もちろんこれは、主のしもべの女性形です。自分にとって、得になるのか、損になるのか、一顧だにせず、ただ主が語られたのだからという理由で、これらの言葉を受け入れたのです。私たちには、そのような聞き方をしているでしょうか？どうしても、神がこんなことをしてくれるから、あるいは、こんなことをしたら大変なことになるとか、条件を付けて聞いてしまいます。しかし、しもべ、あるいは、はしためは、主人に対して無条件なのです。

そして、「**あなたのおことばどおり、この身になりますように。**」という言葉であります。いつも思いますが、お母さんは偉大だと思います。お父さんも偉大ですが、お母さんは自分の身をもって、新しい命を生み出す器となる覚悟をしているのです。男にとって、子が生まれることは客観的な部分があります。しかし、女にとっては自分の身を、いわば「傷つけて」産むのですから、大きな覚悟です。ですから、「あなたの言葉がそのままになりますように」という祈り自体がすごいことですが、それが自分の身に起こりますようにと願うのは、本当に文字通り、身を張った従順です。

2B 大きな犠牲

主が、なされる大いなること、その祝福を受けるのは、このような静かな従順が必要です。そして、これは私たちが知っているように、大いなる栄光です。全ての人の主イエスの母になるのですから、とてつもない大きな恵みです。しかし、ここからが大事です。主の大いなる恵みを受けるということは、その恵みの大きさが分からない人々に囲まれて生きていく、ということです。

1C 不品行の誹り

マタイによる福音書を見るならば、マリアが妊娠したことを知ったヨセフが、内密に離縁しようとさえしました。しかし、御使いが同じように聖霊によって身ごもったのだと伝えます。それでヨセフは、結婚してからも彼女を知ることなく、イエス様が生まれるまで待ちました。しかし、彼女がヨセフを知る前から妊娠していたということは、聖霊によって身ごもった、その子が神の子であり、聖なる方なのだなど、誰からも理解されません。それで、マリアが不貞の罪を犯したのだという噂は、根強かったのです。イエス様が、ユダヤ人たちと言い合いになった時、ユダヤ人たちがこう言ったのです。「ヨハ 8:41 私たちは淫らな行いによって生まれた者ではありません。私たちにはひとりの父、神が

います。」イエス様のことを、淫らな行いによって生まれた子であると、当てこすったのです。マリアには、絶えず不貞の罪を犯したという疑いが付きまとったのです。

2C 心を突き刺す苦しみ

そしてマリアは、自分の子が苦しみを受けるということを、目の当たりにしなければいけません。主が十字架に付けられていた時に、主はヨハネに語られましたが、その傍らにはマリアがいたのです。そして母マリアにも語られたのです。無残にも十字架に付けられたイエス様を見なければいけませんでした。

このことを、幼子イエス様をエルサレムで主に献げるために来たヨセフとマリアに、シメオンという人が祝福したのです。「2:34-35 シメオンは両親を祝福し、母マリアに言った。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人々が倒れたり立ち上がったるために定められ、また、人々の反対にあうしるしとして定められています。あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことになります。それは多くの人の心のうちの思いが、あらわになるためです。」神の大いなる祝福が、マリアにあることをシメオンは告げました。しかし、それはイスラエルの人々が立ち上がるだけでなく、倒れることも含まれます。主について行く人々が起こされるだけでなく、反対する人たちも起こされます。主イエスがおられるだけで、そこには人々の心が露わにされるのです。普段は平穏にして、善良なように見える人々が、イエス様に触れて、その深い部分、闇の部分も明らかにされるのです。それで、マリアの心も突き刺されるというのです。

私たちに与えられている使命というのは、こういうものです。私たちは、神から祝福されたいと願います。そして事実、神は私たちを祝福してくださいます。そして、神の圧倒的な恵みによって、私たちを、ご自分の計画の中で用いる器として選ばれます。その恵みに、信仰の従順によって私たちは応答します。しかし、その恵みが私たち人間の思いを超えているゆえ、かえって人々に疑われたり、反対されたり、また人々が光に引き寄せられるだけでなく、闇の部分が露わになるというものも、目撃しないといけなくなります。しかし、マリアが主の母として、イエス様を人として現れるその器として用いられるように、私たちも、その召しに従順に応答することによって、そのご栄光が現れるのです。

ペテロは、ローマによる迫害を受けているキリスト者たちに、励ましを与えました。「I ペテ 2:9 しかし、あなたがたは選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神のものとされた民です。それは、あなたがたを闇の中から、ご自分の驚くべき光の中に召してくださった方の栄誉を、あなたがたが告げ知らせるためです。」その迫害下にある、苦しみを受けている兄弟たち、姉妹たちに、ペテロは、「あなたがたは選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神のものとされた民」として励ましました。そして、事実、そうなのです！ 私たちがいつも、目に見えるところではなく、目に見えない神の霊的祝福を見ることが出来ていますように。